

医学教育学会 講演(2010年7月30日)

黒川 清
政策研究大学院大学教授
東京大学名誉教授

1,060字

「休学のすすめ」：グローバル「Web 2.0」時代の人材育成

この10年、世界のありようは劇的に変わった。「グローバル化」、「フラット化」の進み方がとても早いのである。さらにアジアの台頭、日本の存在感の低下である。

わが国では「医療崩壊」の認識は広がり、医療制度改革は国民的課題になっている。しかし、医療制度改革は米国のオバマ大統領の改革を見ても、どこの国でも大きな政治的課題なのである。医療は社会の根幹とはいえ、日本の社会問題は10-20年前に比べてとても大きく変化した。人口の23%が65歳超の高齢社会、出生率の低下とともに人口減衰に入った。都市化、高齢化とともに疾病構造は変化した。貧困 Index はOECD19か国で下から6番程度。1997年から自殺率が先進国では異常に高いまま。女性の社会進出は進まない。「単線路線、タテの男性社会」はグローバル時代にますます内向きになっている。

この10数年、医学教育の話題といえば、「BST、Clinical Clerkship、PBL、FD、EBM」等々であったろうか。何か根本的に変わったのか？主要な教育機関である大学医学部、医科大学の教育改革は医療制度のはざまにあって困難を極め、国立大学は法人化でこれも苦難の道へ向かっている。医療事故問題も大きく扱われている。

卒後臨床研修が大学病院のありようを難しくした、という意見もあるが、従来からあった問題を浮き彫りにしたのであって、その効果は確実に広がっている。国の政策はグローバル時代でも大きな目標も立てられず漂流している。大学改革はどうか。アジアの成長を見ても、グローバル化への対応が極めて遅い。これらは基本的に「Web1.0」の問題であり、一部は「Web2.0」への変化を表している。

「Web1.0」とは情報が医療人側に、国境を越えて共有され始めた、ということである。「BST、Clinical Clerkship、PBL、FD、EBM」などが英語であるところにもその本質が現れ

ている。「Web2.0」は情報が一般国民に、国境を越えて共有される時代がきた、ということである。世界の「フラット化」は後戻りすることはない、ますます進む。

このような将来を見据えたとき、将来の医師の育成を担当する大学の課題は一義的にきわめて重要である。では、医学教育で、10年、20年後の医師のありようを考えると、どんな要件が必要とされるだろうか？

私たちにはグローバル時代の日本を「外から」見る、医療制度を見る、医師像を見る、医学教育のあり方を見る、自分を見る、これらの能力をどのくらいあるだろうか？世界は広い、相互依存が強まっている、グローバル世界の課題は共通である。「井の中の蛙」は通用しない、だから「Web2.0」時代へは「休学のすすめ」なのである。これを皆さんと一緒に考えてみたい。